

香取遺産

vol. 140

城山6号墳

「最後の前方後円墳」

城山古墳群は、小見川の「城山」と呼ばれる台地上にあります。現在のところ28基の古墳が確認されていますが、他にも未調査のまま消滅した古墳があったようです。昭和38年、県立小見川高校建設による造成工事中に調査された城山1号墳は、横穴式石室内から三角縁神獣鏡をはじめ、多くの副葬品が出土したことから、全国的に知られています。

その後の整地工事中の昭和39年に、新たに発見された石棺7基が、さらに、小見川中学校建設により昭和41年に城山6号墳が調査されました。いずれも早稲田大学考古学研究室によって行われ、ブルドーザーによる整地工事の合間に実施された短期間の調査でした。

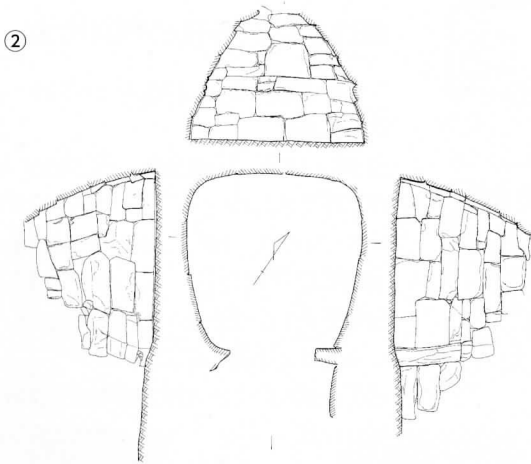
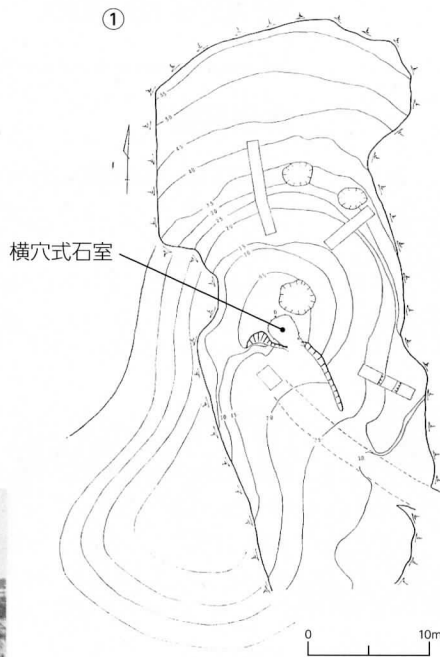
城山6号墳は整地工事で半分近くが削られていましたが、調査の結果、推定全長42mの前方後円墳で、埋葬施設は後円部中央に設けられた横穴式石室であることがわかりました。石室は、遺骸を安置する玄室と、外部からの通路である羨道からなり、全長3・3m、玄室長2・4m、玄室幅2・4m、羨道長0・7mです。古くに盗掘を受けて開口していたため、わずかに鉄鏝や鉄釘などが残っていたのみで、鉄釘は木棺に使用されたものと推定できます。

横穴式石室は砂岩の切石を使用し、玄室の平

面形は四隅が丸く、奥壁・側壁とも弧を描く「胴張り」形です。また、それぞれの壁面は天井に向かってすぼまるように積み上げ、断面形はドーム状となっています。発掘調査では築造年代を示す遺物は出土しませんでした。墳輪を持たないこと、切石による横穴式石室であることなどから、7世紀の初めごろと推定されます。おそらくは、1号墳に葬られた人物の次の首長の墓と考えられます。このような胴張り・ドーム状の石室は千葉県内では類例がなく、現在のところ、本古墳が唯一です。しかし、「胴張り」の石室は埼玉県を中心とする武蔵地方に多くみられ、この地方の影響を受けた可能性が考えられます。

前方後円墳は、古墳時代の初めから首長墓として全国各地で築造されましたが、7世紀に入ると各地の有力者は方墳を採用するようになり、前方後円墳は終焉を迎えます。城山古墳群でも6号墳以降の前方後円墳は確認されておらず、最後の前方後円墳と思われる。

生涯学習課 ☎(50)12224



①城山6号墳測量図②横穴式石室実測図③調査地遠景

